

新たな礎石を固め

1



鳩山文部大臣の来校（左から山崎延吉、寺部だい、鳩山文部大臣）

「これらの作品はみんな拾い集めの材料からできあがったものでございます。

この羽根布団、子ども用のケープ、襟巻^{えりまき}などは、生徒たちはほとんど農家で鶏を飼っておりますので、それぞれの家で拾い集めさせた抜け毛をきれいに洗い消毒したものを使っております。

こちらにあります座布団と夜具も学校に落ちています縫い糸の屑で作っております」

「ほう。抜け毛や屑糸でねえ…」

「縫い糸はどんなに短いものでも一年間注意して拾い溜めておきまして、それを横糸にして機に織りますと、こういう風合いのものででき上がります」

「一年間の拾い集めでこんなになるのかね」

「ハイ、座布団が十枚と、普通の夜具三枚の一组ができ上がります

した」

「うーん、これは大都市の学校などでは真似ができない、立派なものだねえ」

昭和七（一九三二）年四月二十二日、安城女子職業学校では物々しい一行が来訪していた。だいが「これはすべて廃物利用品です」と、胸を張りながら、教育行政のトップに出品物の説明をしていた。

ときの文部大臣・鳩山一郎が教育視察のために西三河地方へ来た。岡崎で美合の種畜場、梅園小学校、師範学校を視察したのち、山崎の案内で安城農林学校へ行き、次いで安城女子職業学校へ寄った。「農業と家事科とを結びつけた特色ある女子教育機関」ということで、特に視察したのである。

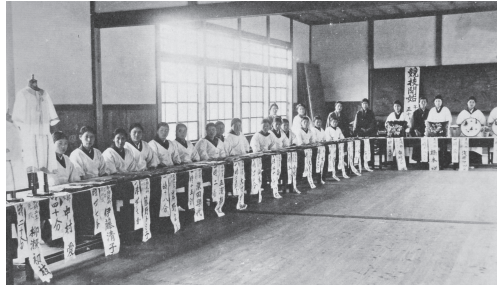
学校では、学校の特色の一つとして誇る、廃物利用製品の数々を披露した。かねて準備しておいた「廃物利用展」で、自校独特の創意による作品を、小物の利用品なども含めて二千点を展示した。この陳列に、鳩山は驚きの眼を見張った。そして、この「利用更正品」に興味を持ち、またその出来に満足した様子を見せた。

「廃物もこれほどに活きるとは…。これだから私は本校を見に来たんです」

鳩山はすっかり感心した。

2

「本校では、服装研究、着付研究、衣服材料研究など、理論的な裏付けを重視しており、技術面で



校内早縫競技会（昭和5年）。成績優秀の生徒は安城町内の丸山製糸などに教えに行った

また、家庭での母姉弟妹の衣類の仕立直しを励行させ、その仕立直しによって家族の衣類調整の能力を養うようにしております」

だいは、日本古来伝わる物の命の尊さ、ひいてはすべての物を大切に作る精神を教育に活かしているのだった。

「農村における女子教育としては、このように農業と家事を直結させることができて初めてその目的が達せられる」

も、ミシン習得は実科高等女学校などは普通三年になってからですが、本校では入学間もない一学期に運動着袋、体育の服装、ブルマー、ユニホームを教材として早くからミシンに習熟させております」
だいは、自校独自の教育の特色を説明した。だが、特に強調してこう告げるのだった。

「しかし、私どもはまた、仕立直し、廃物利用など更生に力を入れることも教育の特色としており、それによって、基礎から応用へと創造性の伸長を図っております。

質素儉約をモットーに教材の二回使用、仕立直し、繰り回しを重視しております、既習材料速縫い、既習材料復習など、『既習材料にて練習』を中心としております。

鳩山は、これに賛辞を送った。

これはわが国唯一の農村における女子専門学校として、地域の独自性に立脚し定着した教育方針に対する評価でもあった。

傍らで主客のやりとりを聞く山崎にも大きな満悦感があった。

―物を生かして役立たせることは、経済の道であり、道徳の道であり、生活の極意である。農の意義もまた、勤労と生命の道にほかならない。今や安城女子専門学校は、職業学校を基盤にわが国唯一の農村本位の女子専門学校として、この新興農村の中心地にしっかりと根づくであろう。農業のために誠に喜ばしい限りである。

山崎は心の中で快哉を叫ぶ思いにあった。

3

昭和七（一九三二）年の大臣視察は、学園にとって大きなトピックニュースだったが、全国的にもその存在が脚光を浴びることになり、当時の教育視察は玉川学園を視察してから安城の女子専門学校・職業学校を視察するというのが一つのコースにもなった。

玉川学園は、昭和四（一九二九）年に小原國芳により「全人教育」を教育信条に掲げて開校。創立以来「全人教育」を教育理念の中心として、人間形成には真・善・美・聖・健・富の六つの価値



昭和5年の展覧会では4000人が来場した。毎年2月に開かれ、安城の祭礼並みのにぎわいを見せた

を調和的に創造することを教育の理想として独自の教育を展開していた。そして安城での女性自立に基づいた教育、物の活用に徹した教育―。共に特異ながら示唆に富む教育イズムとして全国の学校から熱い注目を浴びたのだった。

*

昭和十一（一九三六）年、学園は開校二十五周年を迎えた。明治四十五（一九一二）年の裁縫女学校開校からの年輪だ。

安城女子専門学校と安城女子職業学校合同で「校報」が発行され、ここで、二十五年間における卒業生約二千名を送り出し、現に約三百名の在校生をかかえて、学校経営は安定のうちに推移しているといった現勢がうたわれた。

昭和十（一九三五）年度の生徒数は『愛知県学事要覧』（昭和十二年十月刊）によると、職業学校が本科と選科を合わせて二百四十一名、専門学校は本科と別科を合わせて二十五名であった。

だが、職業学校・専門学校で特徴的なことは依然として具現されていた。それは、県外応募の多いことであった。

昭和十一（一九三六）年三月には、職業学校本科卒業生七十六名のうち三十一名、専門学校卒業

者では十一名のうち四名が県外出身であった。大正末期以来、県外出身者が多いという本校の伝統は依然と続き、『全国区学校』として『健在』だったのである。

4

「とにかく日本中探しても、この学校ほど裁縫の技術のよく出来る学校は他にはないと思いました。卒業生はみな裁縫が上手でした」

周辺の高等女学校の先生を歴任して、昭和七（一九三二）年に安城女子職業学校に赴任した教員（松平すゞ）も客観的にこう回顧する。

専門学校在学中に、岡崎で催された早縫い競技会に出場して他を圧して優勝した学生もいた。職業学校の自他共に認める裁縫技術の優秀さは、専門学校生にも厳とした伝統として受け継がれた。

教育内容も先進的だった。

「おそらくその頃の女学校では、まだ洋裁はほとんどやられていなかったと思いますが、私たちは本格的に洋裁を習いました」

県外、全国から多く馳せ参ずるだけに、学生・生徒たちははっきりした目的意識を持って、こうした教科に取り組んでいた。

そうしたなか、安城学園の『洋裁教育』はさらに進化を見せる。



昭和 13 年に開校した東海女子洋裁学院

昭和十一（一九三六）年、専門学校に修業年限一カ年の家政科を設けるとともに、職業学校の実習部に洋裁科を設置して洋裁授業を本格化させた。

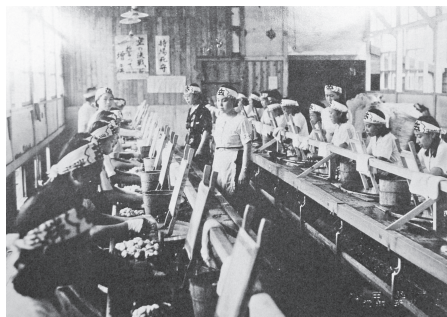
これは、経営的にも安定していた附属幼稚園が町立保育園設置の影響で閉鎖のやむなきに至ったため、その財政補完という意味もあったが、時代のニーズを敏感に取り入れた措置でもあった。

この頃は、女子生徒の服装も時代の推移とともに和服から洋服へ。職業学校でも昭和七（一九三二）年の入学生から、それまでの二部式（上下に分かれたきもの）の上着に袴はかま着用という和服式からセーラー服にひだスカートを制服として定めていた。

そんな時代の流れの中、洋裁を学ぼうと志す者も多く、そうした希望者のために、翌昭和十二（一九三七）年には安城町内（現安城市御幸本町）に「東海女子洋裁学院」を設置した。

これは、安城地方における最初の本格的な洋裁教育機関であり、この地方に洋裁を普及させた草分けとして記録されるものであった。

こうして安城での戦前の教育において先進的に多くのエポックを刻んだ学園だったが、やがて戦雲の暗影が大きくかざし、昔年の特色も発揮できない雌伏しふくの時に入っていくことになった。



学徒動員生として繊維工場で働く

夕陽が地平線に吸い込まれていくように見られる広々とした三河平野、その中にある学校周辺の田園風景は相変わらずだった。だが、その落日を見送る人びとの思い・感情は、時を経るうちに微妙に変わっていった。国民をめぐる時代環境が大きくひずんでいったからであった。

昭和六（一九三一）年の満州事変勃発は、軍部の台頭、軍国主義の鼓吹こすいを招くことになった。そして昭和十二（一九三七）年七月七日、日中戦争が勃発すると、それまでの準戦時体制が戦時体制に……。軍事色が一段と強まるとともに戦時経済統制も始まった。昭和十三（一九三八）年には国家総動員法の発令、昭和十四（一九三九）年には興亜奉公日の制定と、「銃後」思想も高揚され、「ぜいたくは敵だ」といった、窮乏けんぺんに耐えることを求める標語などもしきりに喧伝けんでんされた。

こうした挙国体制は、昭和十六（一九四一）年十二月、太平洋戦争への突入によっていよいよ強まり、日本の教育にも限らない崩壊をもたらした。

戦局が熾烈しれつになるとともに、軍需部門を中心に労働力不足が深刻

化したため、学徒動員が始まった。昭和十八（一九四三）年六月には「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定。翌十九（一九四四）年三月には「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」により、学徒全員の工場配置が閣議決定された。

これにより、安城女子専門学校（現安城女子大学）の学生、安城女子職業学校の生徒もまた、学徒勤労動員によつて大同製鋼・大日本兵器・中央発條などの各工場へ勤めることになった。

ペンや縫い針をハンマーやヤスリに持ち替えて働く、そうした学生・生徒たちの姿を、だいは複雑な思いで眺めるしかなかった。

—これまでひたすら追求めてきた教育の成果も今は無為…。

ただ、すべきことは、日に日に窮乏を極めてきた日常の衣食住の生活において、「廃物利用」の理念をいかに世に浸透させていくかであった。

安城学園の戦前の輝ける教育も今は発揮することもかなわず、日々は戦雲いよいよ陰しく暮れていった。